

## サラワク東部のイバン族の自然観

百瀬邦泰（愛媛大）

持続的森林利用オプションを探る際の前提として、住民が森林および森林生物をどう利用し認識しているかを明らかにする必要がある。サラワク東部のランビル国立公園の周辺で焼畑や商品作物栽培を営むイバン族の自然観を、植物の利用と認識から探ることにした。

イバン族は、原生林を畏れ、それを切り開くことで自分たちの生活しやすい空間が造りだされると考えている。そのことは、林縁に生える低木である *Leea*、強度の人為的攪乱の表徴種である *Melastoma*、原生林に多く見られる

*Goniothalamus*、大型 *Ficus* に付与された呪術的意味、あるいは御伽噺から窺うことができる。さらにそれは、狩猟採集民プナンと比較したときの原生林性植物の利用法や命名体系にも現れている。

イバン族による植物の利用と認識において、一斉開花現象を無視することができない。一斉開花とは、原生林の植物の多くが2から10年の不規則な間隔で同調的に繁殖することをさす。このため原生林の動植物は、普段は焼畑民にとってたいへん使いにくい。彼らは、狩猟も植物利用も主として二次林で行う。しかし一斉開花時は例外で、イノシシ狩り、果実集め、エンカバン（イリペナッツ）採りなどのために盛んに原生林に入る。このように、畏れの対象である原生林も、一斉開花という森の祭典の間だけは、焼畑民にも芳醇な恵みをもたらしてくれ、彼らと森との親密な関係をもたらしてくれる。

以上のように、植物の利用と認識についての基礎的情報を集めることで、彼らの自然観を探ることができる。現在、プロット調査に基づいて面積ベースの定量データを集めることで、さらに詳細な検討を進めている。また、プロット調査では、土地利用－植生－生物相の関係を明らかにし、生態学や人類学における諸仮説を立てたり検証する際の基礎データを集めること、各植生の、住民にとっての物質的・精神的価値をあきらかにすること、生物相と生物間相互作用の関係を明らかにすることなども期待されている。